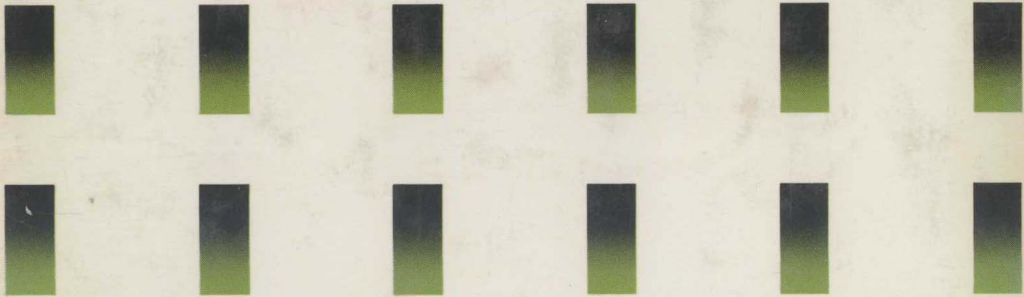


Oliver E. Williamson

市場と企業組織

O・E・ウィリアムソン

浅沼萬里 岩崎 晃一訳



MARKETS AND
HIERARCHIES

市場と企業組織

O・E・ウィリアムソン

浅沼萬里 岩崎 晃一訳

MARKETS AND HIERARCHIES

Oliver E. Williamson

日本評論社

著 者 **Oliver Eaton Williamson**

1932年 生まれ

1963年 カーネギー・メロン大学 Ph. D. (Economics)

1968年より ペンシルヴァニア大学教授

現在 Charles and William L. Day Professor of
Economics & Social Science.

訳 者 ^{あさね ばんり}
浅沼 萬里

1935年 生まれ

1963年 京都大学経済学修士

1968年より 京都大学経済学部助教授

^{いわた きき あきら}
岩崎 晃

1947年 生まれ

1972年 京都大学経済学修士

1978年より 甲南大学経済学部助教授

市場と企業組織

1980年11月15日第1版第1刷発行

訳者／浅沼萬里・岩崎 晃

発行者／小林昭一

発行所／日本評論社

東京都新宿区須賀町14 電話／東京341—6161(代)
〒160 振替／東京0—16番

印刷／港北出版印刷株式会社

製本／株式会社 難波製本

© 浅沼萬里 1980年

序文

本書は、市場 (markets) と階層組織 (hierarchies) それぞれの内部で、また両者のあいだで、経済活動がどのように組織されるかを考察の主題とする。市場での取引 (transactions) は、自律的な経済単位のあいだでおこなわれる交換ともなうものであり、そのような交換はミクロ経済分析のおなじみの研究対象であるが、これに対して、階層組織のなかでの取引は、単一の管理単位の内部に取引の両側があり、なんらかの形の支配と服従の関係が優勢を占め、かつ典型的には、統合された所有が成立している、という状況のもとでおこなわれる取引である。

また、標準的なミクロ理論は、一般に、企業と市場のあいだで経済活動がどのように組織されるべきかという問題を、解決ずみの与件とみなすのであるが、これに対して、本書で展開しようとする市場と階層組織の研究は、種々の代替的な契約様式の効率上の諸特性を評価することを、明示的に企図するものである。このことに対応して、伝統的な分析が主として最終生産物の市場を調べることに心を奪われていたのに対し、市場と階層組織の研究は、それに加えて労働市場、中間生産物市場、および資本市場に関連する諸取引を、集中的に研究することを必要ならしめる。

これに関連して、私は、標準的なミクロ理論のモデル組立装置は、多くの興味深い取引関連的な諸現象をあつかうには不十分な程度にしかミクロ分析的でないということを主張する。本書で、私は、「組織の失敗の枠組 (organizational failures framework)」という名をつけた分析の枠組を提唱し、これをくりかえし用いながら、関連する取引の組を市場で遂行することの効率性ないし企業内で遂行することの効率性を評価することを試みる。

私は、やや伝統的でない世界観をとるのであるが、ジョン・R・コモンズの流れを汲む人びととコモンズの研究者

とは、取引こそがミクロ経済分析におけるもっとも根源的な分析の単位であるという彼の言明に私がくみしていることを認めるであろう。この見解は、いまだかつて広くうけいれられたことがなく、コモンズの影響力が最大であったときでさえそうであったが、まして現在ではその影響力はいちじるしく衰えているのである。私がコモンズよりも説得力の強い論を展開できたかどうかは定かでない。とはいえ、取引の分析がコモンズと他の制度学派の人びとによって経済学の研究にとり中心であるとみなされていたことをみておくことは興味深い。

私のあつかい方は、制度学派の人びとと少なくとも三つの点で異なっている。第一に、私は、市場の失敗に関する、四〇年前には利用できなかった広範な文献に依拠することができる。これは相当な利点である。第二に、市場と階層組織のミクロ分析的な研究を標準的なミクロ理論と本質的に矛盾するものとみなすよりも、むしろ私は、この二つを補完的なものと考えたい。取引関連的な接近は、それが実り多い洞察をうみだし、多様な諸現象を体系的に組織だてうる程度に応じて有用であると思う。興味深い諸現象について、標準的なミクロ理論はなにも語っていないことが多い。したがって、関連する諸問題を集計化の一段すすんだレベルでとりあつかう標準的な経済分析の方法を捨て去る必要はない。とはいえ、このような折衷主義がときとして緊張をもたらすことは確かであるが。第三に、右の点と関連して、私は、一九六〇年代の初期に「カーネギー学派」にみなぎっていたいささかユニークな知的雰囲気に依拠している。この雰囲気は、社会科学の諸現象の研究に対する学際的接近と、「古い諸問題の新しい定式化」に対する伝染性のある——興奮作用さえある——熱中とをともなっていた。

私は、完成稿のまえの原稿をみていただいた多くの研究者たちから、この書物では一つの独特の世界観が提示されており、またそのことを強調すべきであるという助言をうけた。改訂をおこなって完成稿をつくるにあたり、私は、この助言を尊重しようとした。その結果、本書は種々の面で論争的にみえるようになってくるかもしれないが、意図的に争いをおこそうとしているのではない。私が異論をたてた従来のいくつかの見解は、ちっぽけな仮想敵を仕立て

あげるために採びだしたのではなく、それらが現在までに得られている最上の説に属するものであるからこそ採びだしたものである。

本書があつかっている取引関連的な諸問題は、複雑で、とらえがたい場合がしばしばある。それゆえ、特別なボキヤブラリーを考案して体系的なとりあつかいの助けとした。したがって、読者は、論の運びについていくためには、このボキヤブラリーになじまなければならないし、より一般的にいえば、「取引関連的に考える (think transactionally)」ことに慣れなければならない。このような投資が、ただたんに必要であるというだけではなく、少なくともときとしては利益をうむこともあるということとは、ある同僚が完成稿の一つ前の原稿について書き送ってくれた手紙のなかの次のくだけから、うかがえよう。

「……限定された合理性、情報の偏在、少数主体間交渉の問題等に関する複雑な文章は、はじめて読む者にとって、たじろがされるものがありましよう。いまでは私にとってすべてが非常に明瞭であると思われるので、どのように改善の助言をすればよいのかはつきりしませんが、ただ最初は非常に難渋するということを認識しておかれる必要があると思います。」

私はそのことを認識してもいるし、同情もする。もし、他のやり方でうまく論じることができたら、そうしたであろう。

私は、本書の素材について、学生であると教授であるとを問わず、多くの研究者の助言を求めたし、またうけることができた。とりわけリチャード・ネルソンとポール・ジョスコからは、透徹した批判と力強い激励をうけた。原稿の全部または一部を読んでもくださり、かつ助言をあたえてくださった他の諸教授は、ブルース・オーカーマン、ケネス・アロー、スタンレー・エンガーマン、ラルフ・ギンズバーク、ヒューイル・ジョーンズ、デニス・ミューラー、アルマリン・フィリップス、リー・プレストン、およびフレッド・ウェストンである。

私は、本書のすべての素材を私の学生たちと討論し、こうした授業時間をもてたことから非常に大きな利益をうけた。ジェフリー・ハリス、ラリー・ハーバークンプ、ハリー・ピンソン、マーク・ルービン、シャロン・サロー、デীবッド・ティース、およびケネス・ボーゲルが、口頭で、ないし文書であたえてくれた助言は、とりわけ有益だった。

いくつかの章は共著者の助力をうけつつ書かれたものである。ジェフリー・ハリスおよびマイケル・ワクター（第四章について）、ナロットム・バーガヴァ（第八章について）、およびドナルド・ターナー（第九章について）の協力に感謝する。

本書の研究は、一部はブルッキングズ研究所からの研究助成金によって、一部はフェルズ行政センターによって、またもっと最近には全米科学財団からの研究助成金によって支えられた。これらの御援助のそれぞれに対し、御礼を申し上げる。ブルッキングズ研究所からの助成金は、同研究所の「経済活動の規制に関する研究」というプログラムにもなるものであるが、このプログラムは、フォード財団の財政援助をうけたものである。本書に述べられている見解は、かならずしもブルッキングズ研究所ないしフォード財団の役員、理事、その他のスタッフの見解を代表するものではない。

本書の多くの章は、以前に公刊された私の研究成果をもとにしたものである。第二章、第三章、第五章および第六章は、大部分、*American Economic Review*, Vol. 61, May 1971 および同誌 Vol. 63, May 1973 に（非常に圧縮された形で）掲載された材料にもとづいている。第四章は、*Bell Journal of Economics*, Vol. 6, Spring 1975 に掲載された。第七章は、*Industrial Management: East and West* (Aubrey Silbertson and Francis Seton, eds., Praeger, 1972) に掲載された一論文にもとづいているし、第八章は、*Market Structure and Corporate Behavior* (Keith Cowling, ed., Gray-Mills, 1972) に発表された一論文にもとづいている。第九章と第十二章は、*University of Pennsylvania Law Review*, Vol. 122, June 1974

所収の論文をもとにしたものである。第十章は、*Proceedings of the International Conference on Monopolies, Mergers, and Restrictive Practices* (J. B. Heath, ed., HMSO, 1971) に掲載された一論文にもとづいており、第十一章は、*Harvard Law Review*, Vol. 86, June 1972 所収の論文をもととしている。ここに挙げた諸出版社は、私がこれらの材料に手をいれ統合して本書のような形にまとめることを許可してくださった。このことについて御礼を申し上げる。

私は妻のドロレスと子供たちの助けによってでき、守られてきた研究促進的な環境から、絶えざる恩恵を蒙ってきた。私の努力に対する彼らの好意と支援は非常なものであったが、私のほうからある程度お返しができていることを望んでいる。

オリバー・E・ウィリアムソン

日本語版への序文

私は、*Markets and Hierarchies* の日本語訳が出版されようとしていると聞き、喜んでゐる。日本の読者たちは、本書がアメリカ経済の諸制度を念頭において書かれたものであることに、すぐに気づくであろう。しかしながら、私にとつても、また他の読者たちにとつても、私が本書でとりくんだ組織の諸問題が国境を超える問題であることは、明らかであつた。確かに、諸国民のあいだの政治的・経済的な相違は重要であり、分析家たちは、こうした相違に対して鋭敏な感受性をもたなければならない。しかし、取引費用の節約が経済学と組織論の研究にとつて中心的であるという基本的なメッセージは、国の違いを超えて当てはまる。

取引は、財またはサービスが、経済活動の技術的に分離可能な諸段階のあいだで交換されるとき、かならず生じる。取引費用分析は、この段階と段階とのあいだの境界面^{インタフェイス}に焦点をおく。技術と定常状態における生産（ないし流通）の費用とに心を奪われている通常の研究のあり方は、種々の代替的な管理構造（*Governance structure*）のもとで課業を遂行することにとまなう計画と適応と監視の費用の比較研究に道をゆずる。

組織設計の問題を表現する一つの仕方は、つぎのようなものである。すなわち、取引を機会主義の危険から守りながら同時に限定された合理性を節約するように取引を組織せよ。この表現の仕方には、取引費用の原因となる基本的な重要な人間の諸属性（限定された合理性と機会主義）に注意を集めるといふ利点がある。さらに、組織設計の問題をこのような仕方で提示することによって、興味深い異文化間の比較を示唆することができる。合理性のうえで人間の諸限界はおそらく先進諸国のあいだでは非常に類似しているであろうが、機会主義的に行動しようとする性向は

異なっていると主張できよう。日本の企業の（そして日本の企業同士のあいだでおこなわれる企業間取引の）興味深い面の一つは、機会主義の危険が、他の西側諸国の経済とくらべて、ずっと低いと主張されていることである。はたしてこれが正しいかどうか、それはなぜか、またその帰結はなにか、といったことがらは、すべて研究する価値がある。

組織設計の問題を提示するもう一つの仕方は、それを管理構造の観点から表現することである。種々の管理構造というとき、現物市場はその一つであり、階層組織は別の一つである（そして両者の中間に種々の混合的な形態がある）。経済活動を効率的に組織するということは、(1)問題の取引（ないし関連する取引の組）の決定的に重要な諸属性を識別し、(2)実行可能な種々の代替的な組織形態を識別し、そして(3)取引を管理構造に識別力をもった仕方（取引費用を節約できるような仕方）で組み合わせることを必要とする。

私は、組織設計の研究に対するこの第二の接近を、“Transaction Cost Economics: The Governance of Contractual Relations”という論文で展開したが、この論文は、*Journal of Law and Economics* の一九七九年一〇月号に掲載されている。日本の読者で、本書の枠組を操作可能なものとし検証してみたいと思う人びとには、この論文が、そうした目的のために役立つであろう。

初期の応用の結果からみて、本書の枠組は、民間部門と公共部門の双方における内部組織と市場組織の双方の問題を研究するうえで役に立つ。経済学の内部でそれを応用できる領域のなかには、産業組織論、比較体制論、および経営史がある。この枠組の学際的な応用も、主として組織論の理論家たちとマーケティングの専門家たちのあいだでおこなわれている。しかしながら、どのような用途に使われるにせよ、取引費用分析は、主として、標準的なミクロ経済理論に対する代替物とみなされるよりも、補完物とみなされるべきである。この二つを賢明なやり方で結びつけてゆけば、きたるべき一〇年間に、理論と公共政策の両面における多数の社会科学的問題に解明をあたえることに役立つ。

つであらう。日本においても多数のめざましい応用がおこなわれるであらうという見通しの点で、私は楽天的な気持ちを抱いている。

一九八〇年七月

オリバー・E・ウィリアムソン

目次

序文

日本語版への序文

はじめに.....	1
-----------	---

第一章 新しい制度の経済学をめざして.....	5
-------------------------	---

一 いくつかの先行文献.....	7
------------------	---

二 「組織の失敗の枠組」の予備的な提示.....	16
--------------------------	----

三 三つの例.....	19
-------------	----

第二章 組織の失敗の枠組.....	35
-------------------	----

一 限定された合理性と不確実性・複雑性.....	36
--------------------------	----

二 機会主義と少数性.....	44
-----------------	----

三 情報の偏在.....	51
--------------	----

四	雰囲気	61
---	-----	----

五	要約	64
---	----	----

第三章	仲間集団 ^{ピア・グループ} と単純階層組織	71
-----	---------------------------------	----

一	仲間集団型の目的集団	72
---	------------	----

二	仲間集団の限界	77
---	---------	----

三	単純階層組織	83
---	--------	----

四	精神的関与	91
---	-------	----

五	結論	93
---	----	----

第四章	雇用関係の理解	99
-----	---------	----

一	労働経済学の文献について	102
---	--------------	-----

二	技術に関する伝統的な考え方と特異性を重視する考え方	104
---	---------------------------	-----

三	個人主義的交渉の種々のモデル	110
---	----------------	-----

四	内部労働市場構造の効率性上の意味	122
---	------------------	-----

五	結論	132
---	----	-----

第五章	中間生産物市場と垂直的統合	139
-----	---------------	-----

一	従来の文献とその取引関連的な解釈	140
二	静態的市場	149
三	部品供給のための販売契約	152
四	プラントと設備についての所有権の統合——単純階層組織の延長	157
五	複合的階層組織——雇用関係の拡大	162
六	卸売に進出する前方統合	167
七	結論	170
第六章	垂直的統合(2)——若干の限定	179
一	企業間での交換——若干の限定	180
二	反社会的な帰結の可能性	184
三	独占禁止に対する含意	193
第七章	垂直的統合の限界と企業規模	199
一	追加的取引の内部化——若干の欠陥	200
二	規模の要因の考察	212
三	雇用関係がもつ誘因の限界	216
四	結論	217

第八章 多数事業部制

一 単一型企業

二 組織革新——多数事業部制

三 資本市場での競争

四 最適な事業部制

五 「M型仮説」と結論

補論 企業組織の分類システム

第九章 コングロマリット組織

一 肯定的な面の強調

二 資本市場における競争

三 公共政策上の諸問題

四 若干の実証

五 結論

第十章 技術および組織の革新と市場構造

一 技術革新と市場構造——伝統的二分法

二 技術革新と市場構造分析の精緻化

三	組織革新と市場構造	313
四	システム論的な接近	319

第十一章	支配的企業と独占問題	343
------	------------	-----

一	違法な独占に対する現在の接近	344
二	支配的企業の成立の市場の失敗による解釈	346
三	政府の介入と市場の失敗	356
四	構造的支配の排除措置	362
五	構造主義と行動主義の論争への応用	366
六	支配的企業と組織の失敗の枠組	369
七	結論	374

第十二章	寡占——企業間組織と企業内組織	385
------	-----------------	-----

一	若干の先行業績	386
二	契約の問題としてみた寡占	392
三	契約論的接近と従来の接近との比較	399
四	政策に対する含意——支配的企業と寡占的相互依存性	401

第十三章 結論……………409

一 取引関連的なパラダイムをめざして……………410

二 組織の失敗の枠組と階層組織……………417

三 独占禁止に対する含意……………423

四 将来の研究のための方向……………428

訳者あとがき

索引

参考文献

装幀・駒井 佑二